環海異聞

七

洋学文庫
文庫8
A 202
7

宮城県図書館蔵

環海異聞巻之十二

大槻文庫

本船出帆并歸朝洋中之記

六月十六日　昨日迫　諸事の用意悉く調ひて出帆す此邊海のたゝなまゝ二日走る間も真水を手ゝ掬て試るに塩氣なゝき次第ゝ沖出るゝ從ひ右の方ゝ遠山雲霞の如く見ゆ

同十八日タンツケと云國の海上を過て此所より全く海なりとゝ

桜ゝ此海和蘭ゝてゝ用、ストセイとなゝく都ゝ湊に川續く故をしめの内ハ直水

の如くなるものしるや地図を倩せ見て知らん
「カナスダ」より二千四百里の海路を経て七月四日
頃と覚へて「メンツケ」と云国の「コツペイカワ」と云所より
船をとゝむ
此所滞留中荷物等ハ船中間所の仕切
なしもおなし上りまて
此所地方よりの出崎の様子見て此所の
岬より向地「スウエイツケ」と云国の海岸より對
向して其間の瀬戸至て狹く大船衝拾艘
不と並へて通るる程に見て「スウエーツケ」の
箒火なりとこゝ見へも見ることなり爰ハ魯西亜

の親族の国のやうに聞て
府下二里四方程人居家作も相連まりと見
て家造り 街道及寺塔の類もペトルフルカ
に変る事なき様に見て男女 容姿も
亦同しき様なり但被物ハ少し変りる様
も覚て滞留中ハ使節上陸して別に人
家を借り受て居まり旦船中貯る処の焔
消を不残陸へ移す是ハ何故なりと尋
しに凡て他境へ船を泊め置ハ人質を
とるまた又焔消を渡し置事大法也と云り
此湊数日滞留出帆の節ハ右の宿賃ハ賄

料等過分ニ謝禮し出立せりとなり
此所より醫師壹人画師壹人乗組せ来り
太十郎ハ上陸し府下を一見せり 外の者共ハ船ニ 此男船を悪み所ニて八皆陸へ
其うちとなりたりしか江戸着後病氣同変ニて亂心を得たる遺恨といふへし
のミ居たり
魯西亜人ハ船より陸へ度々出入しけり
桜「ダニツ」を弟那馬児加（テノイマールカ）なり其都府を「コッペンハーカ」と云よし 此都府をなれて所ニ嶌ニて地方を離るる事ヱつりなりと見ゆ 「コッペカロ」を「コッペンハーガ」の轉声と聞ゆ「ダニツ」を「ガー子ーカ」の旧名なり「コッペンハーガ」ハ此大地の東ニ在る「ゼイラント」といふ島の東の海邊ニあり「リント」といふ狭き海峡ありて雪際亜（スートシア）國の地と相對す諸々の地図地誌ニ載セ和蘭譯説ニ詳なり

同廿七日頃「コッペカワ」出船しきより大洋へ出ツ此海
中ハ暗礁多き所なりとて船頭殊の外ニ氣遣心配
のやうなり
八月朔日二日頃「アニゲリ」といふ国の海上を通
船なり
夜中海上ニて軍船一艘あふときに本船ニ向ひて
石火矢のかく鉄炮を發川事頻りなり
此方よりも是ニ應する石火矢をも放ち
たる故彼軍船不審ニ思ひしと見へ段々
漕き寄せ来る使節「レサノット」舟師（カペタン）ニ命し
何船ニていつくの者なる支を問ハしむ「カヘタン」舟

櫓より飛び外りて「ロープル」物ひびいて音声遠きまで通ずる道具和蘭語に「ロープル」と云彼方言何と云へばやを以て高々とやせしハ何船なれハ我
本船へ向かて石火矢を打懸しやと彼船
より答ハ是ハ「アンゲリ」の軍船なり其船
も何方の仕ましまして何等の用ありて爰に至る
やと云是も魯西亜國より日本渡海の使
節船なり何の故ありて斯りに石火矢を打
懸しやと子細兼ねて尋ねまハ船の様
驚轉の様子にて夜分暗紛に見違へる他
國の軍船かと心得かくの振廻ひをせしハ甚以麁
忽の至り恐入りて船の帆を下ひとまら

倪言をなし追々酒肴抔載せ来りて其衆を
陳謝す使節ハ中々是を受ひらハ如何の樹
合なれや供人ニつゝ四五人召具し「アンゲリ」船へ
乗移り其本船を「アンゲリ」の内其の湊まで
船を寄せ我其所に出るを待居るへしと船中
諸役人に渡し相別れ彼船を「アンゲリ」
の都下迄往きし趣なり
此一事如何なる支るやと船中の人々尋ね
きるに「ハランソースケ」拂郎察と云国と「アンゲリ」
国と毎度戦あり近頃も「ハランソースケ」敗軍
しられ共又寄せ来る支も有るきやと軍船

を備へ警固せし樣子の処本船夜中通行せし故「ハラニソース」船の寄せ来るかと誤りてかくの振舞ありしに物見使節彼の都（ロンドンに成る）迄至りていかゝかゝる来るやとヤせし

本船より使節の命受けて「アンゲリ」国の内某と云湊より船城寄せ使節の歸り来るを待受く

此所大湊にて軍船も餘程見へ「ハラニソース」より奪取りしとて彼軍船をも多くかゝる繫き置り

湊の両岸石火矢殺く仕懸備へ置り三階の櫓ある番船もあり

此所より水薪食物等を増し入る（以下和蘭の悪所何方よりも）

諸品増し加へ来る

桜より「アンゲリ」を漢（アンゲリア）又利亜此方にて「イギリス」なり嶋国なまと世々名譽の異國なり都府を籠（ロンドン）動と云ふ近来魯西亜國に降参し来る夏あり全く其国より属せしとかくも種々折言約の事有しとへ夫故此度の麁忽を深く怒る事と聞き使節も其都城迄至りいかゝ取極めたるや知らず此国の夏詳説

詳之船を寄せし湊の名を覚来らしは漂客
世界国海路朱絲を熟閲するに龍動の南邊に朱点あり
又其西南の海邊「ハムヒ」海濱に朱点をなし此所より初て朱
絲を引あり始めの一朱点を「ロサムト」と都へ到らんとして上陸せる
所今によりて本船を廻して着岸「ロサノツト」を待居らし
湊は「ハムヒ」と見ゆ此所より朱線を引きたるは「ハムヒ」
に「ハルムート」又「ハルモート」に作る是諳厄利亜の内「コルニワル」洲
の一城地にして壮
麗なる大湊なり
都府鏤版の世界圖（分図にて方図四枚圓図左右二面壹枚）求め
来る物あり共に
御覧を経て召し上げらる其方圓の物にて
海路の朱線を引たる是を長崎滞留中同
船の彼人漂客等にいふ備等本国より地
図を求め来るとも是迄遍く船しる行路

茫然たる事し其通行の海路を記し與ふ
へしとて四枚共に朱引して贈らる此度編集
参考の為めとて茂質に示し下し玉ふ因て是
を検閲して別に原図を模寫せしめ地名等
戔和解し其朱線の海路をも併せ写して
模図四幅を呈せり其朱線の道節にて
彼国字にて悉く日並を記す共に是を模
して呈せり右原圖模図の外別に一幅の
地図を作り其海路朱線日暦のことを記せる
を和解したる物を添上ぐる事となし也
此圖及細考和解は司天臺にて考定する如く
堅田侯より間氏に命せられ考ふる物とす

扨紫線日暦の記は由まに漂客等暗記し言所矢ひは異なり漂客等の所をとより泛然たる暗記なり役人等なる処の物ハ船中行路日々の記事あるを故に「アンケリ」以下の記聞を是と對校し其説話の下に附記し實證を取る事左の如し

此朱線日暦「アンゲリ」の湊より我長崎の津に至る迄を記し本国「ペトルブルグ」より「アンゲリ」迄の日並ハ欠て略せり是此「アンゲリ」迄の海上を常々通船の熟路にて内洋共云へき、間なる故まやと思ふる政羅巴州の人すべて航海を常とする故萬国通船の海路に引線せる図説多し此度の物も後證の為に實側せるものなる歟

長崎譯官よりの和解書に彼年暦一千八百三年八月十日に「ペトルブルグ」を乗船す（是彼の年月日まて我享和三年癸亥六月廿四日なり）と見て漂客等を亥の年六月十二日と覚へ来れり是彼と此と年暦月日の数も相違せる事なれ共かくの差ひあるへき故又覚違にてもあるまや何れにも右地圖都府より「アンゲリ」迄の朱線日暦を欠きたるは證とせるに便あり

「アンケリ」出帆彼国一千八百零三年九月廿三日（我癸亥八月二日なり）是より彼地の日並を推して我日暦にあて試む故に漂

客等暗記の記聞と相違すること共以
下の紀聞日並々漂客覓へし処を綱々
〜朱線日記と合考ふるものを用となす
の意よて其實微(セウユ)を取らんとすること

同十二三日頃　使節此都の用事相済い趣よて此
湊に来着即本船出帆せ
海路記を按ずるに出帆彼九月廿三日と
あり我癸亥八月八日よりあるる漂客暗
記と八四九日の差なり地圖海路朱線
此所より引きたしむ
出帆後次第よ南よ向ふ洋中四方島山の類一向
見へ〜ず但〜始の内左の方よ「ガラニツ」阿蘭陀あり
と八聞りり
九月三日頃「カナリヤ」といふ嶋へ船を泊む
海路記を按ずるに彼十月九日「カナリア」島
の内「ベッロ」嶋よ着船十日迄滞船出入日数
七日よりて十六日出船と見也是彼十月九日
と我八月廿三日なり即滞留八同廿四日より
晦日よ至る日数六日也
按ずる此亜弗利加(アフリカ)大洲よ属す西洋の諸國
此加那里亜嶋をもて初度よ命す明人譯
所謂福嶋是なり故よ船をよせ滞留〜〜

測量を試るあるゝ此邊諸島散在す惣
名を「カナリア」といふ「ベッロ」を其一也 漂客を
惣名のミ覓へ来まり
再ひ原図の海路来線を熟閲するに「カナリア」とて
船を泊めゝ嶋の名を「テナリヤ」即「テネリフ」として「ベッロ」島
よハあゝす前説誤まり此「テネリフ」を即加那里亜島
の内なて和蘭人此島を以て初度とする可へ此嶋より
西の方東西初度線の下なへルロ嶋の名あり漢名云鉄嶋
提此島を拂郎察人の初度となす所へ
魯西亜人も拂郎察の制に倣て此鉄島を以初度と
せるなり

海上日暦 政邏巴洲より亜弗利加洲に係る

彼九月廿三日「可ニゲリ」出船 我八月八日 彼同廿四日 我同月九日
彼同 廿五日 我同十日 彼同廿六日 我同十一日
彼同 廿七日 我同十二日 彼同廿八日 我同十三日
彼同 廿九日 我同十四日 彼同三十日 我同十五日
彼十月一日 我同十六日 彼同二日 我同十七日
彼同 三日 我同十八日 彼同四日 我同十九日
彼同 五日 我同廿日 彼同六日 我同廿一日
彼同 七日 我同廿二日 彼同八日 我同廿三日
彼同 九日 我同廿四日

日数十六日よりして「カナリヤ」へ着（カナリヤより我廿五日より廿日迄の間六日滞船）
此島を「イシパン」（伊斯把伊亜）の領所なりと此前後諸小嶋
多し此湊沖請けなして海悪し嶋の大さ我九州程
もあると覓む嶋の中高山見む此所至て暖地なり

土人は裸體にて半股引をなし用ひ黒人(クロホウ)に似て黒色薄く頭を残切り也 船の乗針役某と云人皆々に物語るに此地を日本と同じく筋にて寒暖同様の所なりと云ふ 梅は此説信じがたし

此節といへども綿の入り申る程の着服はなさざる嶋人土産の品々をもち船中へ賣に来る

蒲萄 形大なり此品影敷産する所のよし　蒲萄酒

梅は刀ナリアウエサン酒」とて世に名高く上好の蒲萄産する故なるべし又刀ナリーセホーゲル」我邦にて刀ナリーヤ云鳥も此地の名産なりと聞く十二日

柚　梨　橙　香橙(クチンボ)　林檎(リンゴ)

葱(ボタンナ)　の如き物　梅は此品々年中あるべし

豕　鶏　野牛　鷺(アヒル)　此外種々産物

あるべし

船中にて右の諸品を求め皆々用ひ又船へも買入申

薪水を船へ増し加ふ船の人々上陸出入して太十郎ハ一人上陸せし様に見る

人の戸を箱入にしたる物を此所にて求め船に載す穢しき物と思ひ近寄て見ぬ蓋を開きこの時遠く隔てものぞき見るに全く人の死骸へ

按ずるに木乃伊なるべし詳説は詳ずす

此地通用金三角形なるを見るべし

出帆の節島中より役人と見るべきもの五六人 羅紗の服 魯西亜人

の服と大概同じく異形不器用なる見得べし 三角帽を冠り 是又使節の冠帽に酷似せり 見送

に来る 按ずるに是伊斯把 倚亜人なるべし 時彼者共の方にて 碇を引きあげ出帆せんとする

見送りの礼として 空硫炮を 打てり 是出帆

右加那里亜諸島の事 別に委しき詳説有

同十日頃 同十日頃出帆

按ずるに海路記に 彼十月十六日加ナリアに出帆是

我九月一日と見へたり 已下亜弗利加海より亜墨利加洲まで海程日暦

彼十月十七日 我九月二日 彼十月十八日 我九月三日

以下 彼十月三十日 我十月十日迄日並合す

彼十月三十一日 我九月十六日 彼十月の日並に三十一日定数とす

彼十月一日 我九月十七日 彼十月二日 我九月十八日

より以下 彼十月十日 我九月廿八日迄日並合す

圖を検するに我六日より九日迄の間漂客等

がいたゆる風なきと云へる程の静なる海上なる

にや此邊右往左往 ままて 居る様子にて

一日々々の里程至て短し

彼十月十三日 我九月廿九日 彼十月十四日 我十月一日

より已下 彼十月廿九日 我十月十六日迄日並合す

桜彼十月廿九日 我十月十六日ヨリ當る日ヲ
シリーの江カテリナ江ヨ着岸彼盟一千八百零
四年二月七日 我同年十二月廿六日迄十八日の滞
留と見る日数凡そ七十餘日へ

出船以後三昼夜嶌々の間を乗り通りしゝ其後嶌を
一向見ずして此節沖風吹き船を己午の方ヨ走まて
是より数日沖へ走りまい四五日ハ風静ヨなり暑氣
極めて酷〳〵折々雷雨もあり夜ヨ入りても暑熱
甚しき海上ヨ到まて其頃世界の真中へ来りしゝと
て船中祝儀あり水主共迄酒杯のませしゝ其所を江
クットルといひしゝ 使節日本歸帆の節又再び此所を通るなり

桜ヨ江クットルヨ迄羅甸語ヨて赤道の支く
此所亜弗利加海ヨ属ヨ海路記を検
するヨ赤道直下を通船せし頃彼十一月
十四日より十五日の間我十月一日より同二百迄の
間と見る

船師我々へ語りしゝ加那里亜より南亜墨利加迄
の海上ヨ世界第一の平穏なる所ヨて即江クット
ルの下ヨあるヨて年中此所ヨ風も静ヨて波
穏なる所ヨ是より一日も走ハ風出る各々様の所
へ来るハ不思儀の支こと也ひしゝき此島風
静なる故帆て船快く走ル大ヨ帆柱損破せり

又イワンゼヨータロイチと云人語りけるは「ヲルトル」の下ハ
海水動くものや故に里数を測るとも仕まく
此節にかりてハ動く所有り地付のかゝ（寄）ハ南へも
北へも汐道とゝなり夫より里数もたらゝくなるハ爰
より七日も東へ走（走）ハ北風ふくといふ様なる験もある事
の様に見へ（ゆ）ぞ（ぞ）（鑑の誤解カ）
此島より南に一ツ星 北極星 七曜共に見へぬやうになり
故我々は殊の外驚き語り合ひ赤道下を
通り過きて後遠方に船を艘見ぞ遠目鏡にて
是を見るに何国の船なるや聞も留めず双方より
船の小旗を振り合せて通り過きぬ

沖を走る取海水の色変ぜる所二三日通りぞ紅脂
に似て黒くかゝりぞ少しづゝ色共いへべ千に掬りて見
るに上へあげても同色なり今思ふに加ナリヤより南アー
メリカ近の内の海上かと覚ゆ
段々南「アメリカ」といふ所へ船走るよし其国へ近付るに
従ひ次第に難堪程の暑熱となる故に船中毎日水に
浴せり
十月十日過南亜黒利加の内のよし ヲカテリナと云大
湊に船を泊む
梅に海路記を検すれハ彼十月廿九日我十月
十六日着岸こゝ此所近海路の日暦前後に

寫せる如し

此所を南アメリカ洲中の一つの大湊と見る城下も立カテリナと云ふ

桜島「ブラシリー」（伯西児明人譯）の一港と見る地圖并長崎通詞共書上るも「ブラシリー」と有り「ブラシリー」の南にある銀河（譯名）と云川の海に注く取る「シント」カナリナ」と云ふ地有り是なり

再び原図を熟覧するに伯西児の島海に船を泊めるに朱絲を引き分くる所を見るに其大地の岸に近き所にカラリニと云ふ島なり「ロカラリナ」と覚へ来りしに此誤りなり此島赤道以南廿八度の島にあり和蘭人刊行せる度数の表にハ廿七度四十五分に作る非蒲涅児撰する輿地の書に「ニカタリナ」嶋ハ伯西児の海岸に属して赤道の南廿七度にあるる凡て航海する者熟識する処なり是欧羅巴洲に西方に向ふ長途の間なるる故に海伯ちくに至て薪水等船中の用を辯し而後大南海に向ふ

此地「ホルトガリ」波爾牡瓦ホ（尤伯西児の海島ハ波ホルト牡瓦ホ人所領の地なり）の領所と聞く湊も大ひなるも入海に至て浅く大船ハ岸へよする支能はず此入江に小河幾筋も流れ落る所と見る

湊の内に「アンゲリ」船二艘外に異國船二艘繋り居其濱邊に驚固の石火矢を備へ置り土地の船も細長くして笹の葉の如く底に丸木二つ割にあるを物に板を打付る物其長さ江戸の猪牙舟より短し此所年中暑氣酷熱の地にて冬李と云事ハなく聞り船中何とも日に二三度宛水に浴せり魯西亜人も何程嚴暑にても層を露すと云ふ支なし

水浴しても直ちに己れの物を着す常ふる毛織類を
着て皮袋を夏月ふる用ひ熱といふ迄なり
土人色黒し「ペトルフルカ」にて見るるクロホウを真黒
なりしかも又夫より小し薄黒し男女共に跣足(スアシ)且鬚(ハダカ)に
て半股引を着す「カナリヤ」にて見る人の如し但
拳毛(チヂレケ)縮髪にて眼も黒し女子も色黒し脊へ風呂
敷の模様はきくかの如き物をうけ腰よりかけ木綿又は
麻の織物にて袴の裾廣に仕立たる様なる物を着用
する支魯西亜の婦人の如し男女共に入墨いせず
小児も色黒し九禄あり男女共に歯黒し常
に松脂の如きものを噛む不断口を動して居る

様に見る
此湊より二十里程奥に行き千軒程の家居あり
太平郎(ハ上陸して見る)家造りハ瓦もなくて下をなるみあげ二尺程の
上に立石を以て畳く上に屋根ハ櫻の皮を用ひ
按に此話分明なるかの
寺もあり「ロシヤ」の寺の屋上なるものやはり十
文字の物を建てあり寺内を見れば礼拝の様子を
見るに我日本の人の洗しかるの如し
按に此寺「ルチユガ」より建る所なるべし
津太夫上陸して水車にて米を舂する所を見るに
家々石造り屋根も櫻の木を二つ割にして苫く

遠く是城見まゝ八尾屋の如く水車を一つまて三十六
碓をうをる樣ま仕懸たる物あり
此國米殷敷 種蒔するは精米まして多く他國に
交易をすることなり 自国まて米を食ふ事を禁ず
唐黍(蜀黍)を粉まし湯へ入れ糊の如くまして用ひ米を
多く用ひず他国へ出すを重もとするは唐黍我
邦の物と同じ 椀を木地のものなり
唐黍本船に買入牛 豚 鳶 鷲の餌となせり
山八樹木繁茂を見なれしある物まハ香橙 橙 柘見
得ず 餘程奥の方まハ大高山あり 山頂近く中々登
らまぬまし 魯西亜人も此山を見て甚ぶ驚き申す

此所に着岸前洋中まて檣をいゑ免し故ちくまを着
して後使節等の役々上陸し山まて立木を買受け
帆柱を作まり 彼是まて暫く此所まハ滞在す
引き出し来るを湊まて見ることまて堅
木まて赤き耶黒き處も交りしある木 彼人
カラスナゼリ口といひ是八赤木なる事
なり

産物殷し 船中へ數品買入まてくり

茲(ナ)
西瓜(スイクワ)
番椒(トウガラシ) 實小なり木の如く立つのなるなり
菜菔(ダイコン) 細し味を替る変化し
番西瓜(カボチャ)
蕪菁(カブラ) 圓 冬瓜(トウグワ)
胡瓜(キウリ)
蒲萄(ブドウ)
蜜柑(ミカン)
柚(ユツ)

胡桃（クルミ）　林檎（リンゴ）　甘蔗（カンショ）一本太き茎一握りあり牛の飼料ヨ船中へ

多く買入る　白砂糖

大ひなる木實影くあり上皮厚く剥きて見まへ殼
至て堅く人面の如き形ありて内ヨ肉油一ぱいあり
甘きこと　胡桃の如く　黒人（クロボウ）是を器ヨ金さゝ為て
海を游き来さる船人賣る我々も是を買求め
食るヨ口涼く〳〵暫時暑熱を忘る故ヨいくつ
もなく買ひ食せ〳〵なるも
其名を問ひ〳〵忘まし〳〵　茂質思ふヨ此國
暖地なまへハ椰子なるんらと　椰子蛮名ココヤシ　れとひし
故「コツコス」とハいへさりしやと問ふまへハ津太夫
手を打て云ふ貴問て存し出せり彼人等
「コツコス」と吟へて即其殼を水飲ヨ作り持参
せり見せ参らせんと云ふ他日是を見まへハ呆
〳〵椰子殼や

椰子の事　茂質別ヨ詳審の譯説あり

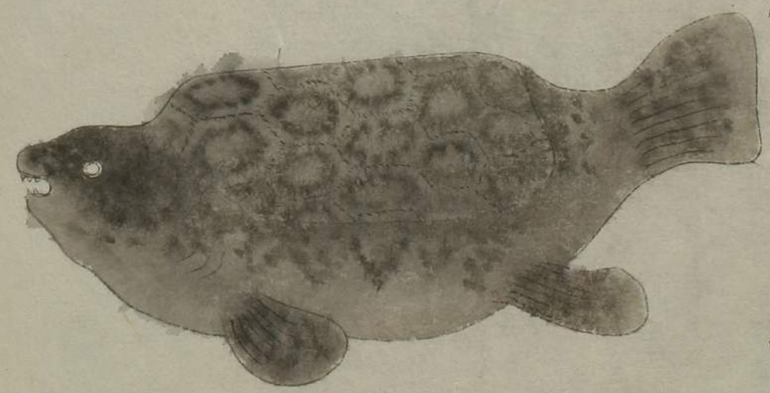
生ては青實のまゝなるコツコスを多く船へ買ひ金さう
蘓枋（スホウ）此国の土産なりと聞しゝ不見
長めて房となりしあるもの相聚りて一叢（フサ）をなし一躰
緑色一房三節角立り長サ二寸半あり初メハ緑り
熟せまへハ内黄色となる青き内取りて一両日置ても
色赤熟せる物の如し房内色白く味甘き変木通（アケビ）

の如し　仁子ハ叢二三十房ほしものハ二三尺程
有り木ゝ草の實ゝ志ゝ圖をなせハ大抵花の如

一　綿ハ山へも圃へも種蒔す高六尺程の木に
葉も大なきも草綿の葉に違ふ事なし

按ゝ木綿かるくし
一　異木薄赤く印黄色の所も有るものを
船へ調え来る　長崎へ来りし日人々いひ
しハ是紫檀なりと
一　魚も不見と見る小蝦ハ多し
一　水ハ皆牙生へてあり脂甚多し牛も同し
腴脂多し　餘り脂氣多しとて魯西亜
人ハ食せ不
一　青色ゝさき鼻と喙と赤くして色甚し美
しきゝ鳥あり鳴声ハ「キウ〻〻」とふ人舌を出
せハ猶と以て吸ふなり名不聞

甲の四角にて亀に似たる魚あり何とゝ
もなし其名はきうり河豚の肝へ似たり



一 猫ゝ三匹ありて我方のものと同しくして性氣
強き樣也狗ハ別に替る事なき樣なり

一 尾長猿あり船中へ買入飼置しに不日ふ
斃(オチ)たり

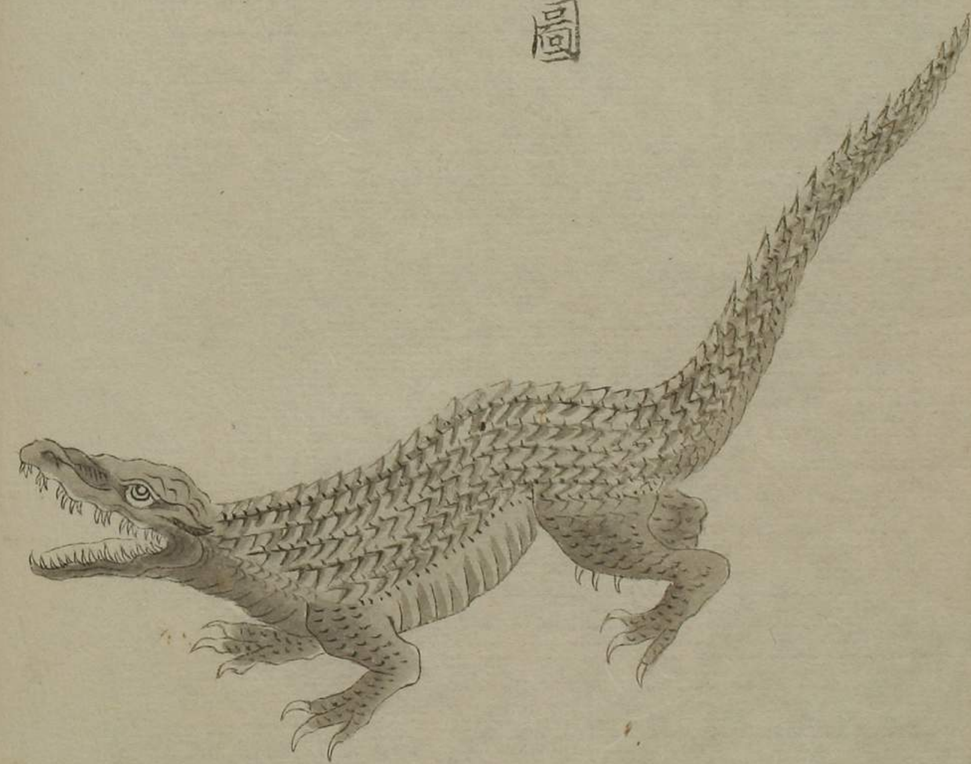
一 毛亂色にて淡白(ウスシロ) 喙長く尾毛ハ鳥班(トラフ)丈
二尺斗り人に馴き易き獸あり惣身悪臭
あり是を四足買ふて船中に畜(カイ)置りし
北内壹足を加ミシヤーツカ」着岸の時同所に
あゝ多あり殘り三足ハ船中にて追々斃しに
「ガルカルゼル」といふ物の子なりといふ皿肺の生(ナマ)ミキ
ものを船へ持参せり其骸の長さ三四尺

皮厚く色薄黒く鱗浮き立ち尾ハ
棘刺あり口のきまあるゝ支七寸斗り
八重歯生て目の上ハ織く瘤の如くなる
ものあり脚凡ハ三本ありて長さ一寸斗り
有其月上瘤の如くなる物生長てきまあ角
とあり山ハも海ハも栖み人をも取り食ふ
と云常に画ハ書ある龍を見る支是と似る
様ハも覺えハ竜の子ハやと我々共申合り
彼人船中ハて酒へ漬けて殺し白き
薬をつけ其腸を取去り目も黒き玉を
入れ生きる物の如くハして貯へ来り

按ハ諸蛮ハいふコロコジルを図を按ずる
に鱸カルカルゼルをコロコジルハ音
相近く且形状も鱸ハ相似あり和蘭
寫真圖を示せるハ全く是と同じく
て少し見て取ハ差ふと云其語る
處ハ就て圖を製する支尤の如し

コロコジル　譯　説別ハあり

ガルガルゼル圖



一 此地より物を買ふハイシパニヤ（伊斯把尼亞）の金銀より交易も此所數日滞在（トヽウ）諸用整ひ出帆の用意をなす

滞在の日數前條に詳なり

十二月廿八九日頃 ヨカテリヤ出船

桜より海路地より彼翌千八百四年二月八日出帆

と見て是 我同年十二月 二十七日にあゝる漂客

の暗記に大抵合 此湊 滞留七十一日也

蠻夷を出帆南へ向ひ走りけゝゝ是まてハ暑熱（ショネツ）禄（ロク）骸（ガイ）て

堪へかゝゝも先きへ至る程海上次第に寒く覚り

此亜墨利加大洲の正南の出崎の海上なりと云取る

至る此邊何といふ所なりと船中の人に問りれハ爰ハ
ゴリノメヒと云取まて至て寒(サム)き取なり此崎さへ乗り
廻し北へ向へハ又至て暖氣なる所へ向ふと望て此邊に
も地方を望めハ山中より火煙立千升リ不絶とへいり
て止ル

案に和蘭より「ヒユールデンド」(火地)なり
邊地方の山より吹来る風至て宜しかるべきに故船其
崎を廻る事叶ハさるして次第に南方の沖へ流され
数日間切り居る翌年三月頃かと覚へしに雪降
て寒氣も強し船中の人殊の外心痛の様子に何故
かく心変しぬるといひ其ハさくさくいよ〳〵南へ流る

きハ七十度以上の海上なる海水氷り通船なき所へ
七十度とふ度も彼を「セームテサツガラト」(セナ度)と云
さりとて南方も北極下と同しく極下に近りれハ
かくある事也拂郎察鏤版の世界圖にハ
南極下にも氷海界限の圖あり寛初漂着
の嶋を出帆し「サンパシヤウ」に出人とせし時
乗り落して氷海へ入りし北極下に近き
七十度前後となる所と見へ漂客等南
北極下に近き海上両樞を窺(キワ)ハ未曾
有なる奇中の奇とふべし又南亜墨(アメ)

利加洲の狹長なる熱帶冷帶より加まるの
大洲なり
七十度前後迄船もなれ共そまより東よ通行
あるべきとの此頃人々いひしをかくの危難詮方なし
願くハ西風にても吹替りドーブラナデジダの方へ船下り
あきと念せしなり
按ずるに彼國版の世界圖ハ亜弗利加洲の力ー
プデグーデホープ（和蘭名によって明人所譯喜望峯）の所ハ此名あり
ナキ右大洲の岬ハして和蘭の領所也北へ
廻るべき船なるハ東へ下らん事を願ふハ實ハ
危難なる事と思ひやるべき事なり

彼是とする内風吹替り順風なるコリノメスを通り
北の方へ向て走りなまきハ既ハ噂せしかとも又漸く暖
氣の海上となまて
海中ハ潮水漏（ワキ）のごとく如く見なる所を通り来る支
あるべしと今思ふなこそらん海上なりしまやと覚えり

ルケイサ迄の海路日記

彼一千八百四年
二月八日（アメリカ出帆）　我亥十二月廿七日　彼二月九日　我十二月廿八日
彼二月十日　我十二月廿九日　彼二月十一日　我甲子正月一日
漂客等ロカテリナを出帆三四日目程ハて
正月と覚へしとなり

彼二月十二日　我正月二日　彼二月十三日　我正月三日
彼二月十四日　我正月四日

彼二月十九日より我正月十四日迄日並合す
我正月四日より同十四日迄ハ間一日の里程甚
短し彼二月廿九日より我正月十六日迄日並
合ふす

彼二月廿九日　我正月十九日

閏氏曰此廿九日の取る手の記号(シルシ)あるハ是
此年の二月閏日の記號とせしと見る魯西亜
にて二月の名をヘホラ」といふ(二月を例年廿八日なり四年目の二月を廿九日とす是閏日なり漂客曰二月を廿八日ある年と廿九日ある年と覚来りしも是まなり餘の月々の日数時令の部に載せ

手を記(シルシ)といふ字にして「ホラ」と配音するの首
字なれハ此字を以て閏日の記号(シルシ)とすと見る

彼三月一日　我正月廿日　彼三月二日　我正月廿一日

彼三月三日より我正月三十日迄日並合す

彼三月十二日　我二月一日　彼三月十三日　我二月二日

彼三月十四日　我二月三日より彼三月廿九日我二月
十八日迄日並合す　我二月廿日より同十八日
迄コリノメス」る間切り居る内に見へる海路
記を見るに一日の里程右往左往至て短し日数
十四日の間に見る十八日より十九日の間里数
初て順風を得しと見へ来る

彼 三月三十日　我 二月十九日　彼 三月廿日　我 二月廿日
彼 四月一日　我 二月廿一日　彼 四月二日　我 二月廿二日
彼 四月三日　我 二月廿三日より　彼 四月八日　我 二月
廿八日にて日並合す
我十八日より廿八日まで十日の間も亦間切居る
日を積りて樣るなり「コカテリナ」を發して
此取まて六十二日を經て見る此頃七十度の
海へも乘り込むかと心支せし節と思ふに
八日に順風を得此岬を乘り廻り北へ向ふと
見へ申す
彼 四月九日　我 二月廿九日　彼 四月十日　我 三月一日

四月十日より三十日迄我日並に合す　彼 四月三十日より　我
三月廿一日にあたる
彼 五月一日　我 三月廿二日
間氏曰彼五月「マアイ」といふは「コ」の記號
あり「コイ」の首字なり此記号ハ海路日暦
の一證ともなし此處亜墨利加の西海へ前
にある二月閏日の記號を以て海路の日暦を
推側するの證據とするなり
彼 五月二日より八日迄我日並に合し彼五月八日より
我 三月廿九日より
彼 五月九日　我 三月三十日　彼 五月十日　我 四月一日

彼五月十日　我四月二日　彼五月十二日　我四月三日

此後彼五月廿三日我四月十日迄日並合す

環海異聞巻之十二終

環海異聞巻之十三

歸朝洋中之記

羽三子年　文化元年甲子　四月下旬「ヘルケイサ」と云嶌邊

船繫りたり

「ヘルケイスケ」共彼人呼し樣は覺ヲ刀ナスゲ[illegible]

此取迄千里を十六合せ[illegible]る里程[illegible]

海路記を按[illegible]ふ此邊[illegible]着船する事

彼五月廿四日　我四月十日と見ヲ漂客

四月下旬と覺し相違せり

此島の近所又六七嶌も[illegible]船中より見へ[illegible]

凡て此邊海深く波浪至て荒き所に本船の人々も
此島へも初ての樣子にて湊口も尋ねて廻りよふ〳〵
一港を見付て船を泊む船中の人皆々詰り〳〵
此島人丈けも高く容貌恰も鬼人の如く男女共に
裸體前陰をも常に顯はし居る地人に備物の
濱邊を望み見るに呆して裸なる男女三四人
見め其顏色黧〳〵男の丈け七尺餘頭面に物身
手足の端々まで彫物入墨をなし陽物を露し
但し先きの皮を切り引き伸して糸の如きものを
以て詰ひ置りし女は丈け五尺程入墨も手先きは
そり有り前もすきの如き草の葉を少しだけ

連れ〳〵物を以て無き不ケ而復ひて紐にて腰に結ひ
止む本船湊へ入るを見て男女共に海へ飛込み船へ
近寄る夏魚の游ぐ如く伺ふ物りて騒々敷本船を
見物の樣子に追々島中の男女殼敷漕き付来る
生椰子（此島暖地にて殼敷椰樹あり）又は鯉（鯉は沖にある島より漂なとを手々に
持来るとあり）其内に髑髏をさゝけ来るとの又は
小兒を脊負なゝ泳き来ると見め漸々二三百人
程に及へり皆取替物を望む体なり此島に金鐵
産せざる地なり然て其樣子を「オロシア」人傳聞
居る樣子にて既に水樽の鐵箍のそなはりたる物を
先達て船中の鍛冶に斷ち切らせ置けり數多の

是を

是程宛出し與へりまハ鰹壹尾
より交易し其鉄を手まさしけて おもき歸り如何なる
珍寶を得し如く悦ぶ樣子也 頻りに是を貪ん
とし船よりこん事を望む趣きまて 男女晝夜
黐敷 船たゝよ辟り 集り騷々敷 支いたんかく
なし 船方の者是を 使節をしてとめ尋常なるまゝ
こんも手もかゝりとて 此島人如何の事仕出
用水を増し加へんもめ 穩便ようす扱ハせ
まて中々熟談懇合も及ひかゝ甚迷惑せり
一日 彼國の船まて 兩人本船へ漕き付し者ハ

是嶌人とも異なりて尤兩人共に裸體まて面に股
へたゝ入墨し頭ハ無髮まて唐人の如く「ヲ布絞
皮之仙臺方言の如き物を 犢鼻褌にし此兩人本船の舟べ
タン」へ書付を以申ハ我々壹人ハ「アンケリ」國壹人ハ
「ハテンソースケ」国の者なり 拾餘年以前此島に漂着し
歸る事能ハ 便りもなく月日を送り内島主の
女壻となり今ハ永住する支となまて こん
此二人の者「ロシア」辞も通する趣こなし ふと兩國の言
葉文字も雜へ居る事なハ互に容子分りあり 偖兩人
「カベタン」等賴みけるゝ本船此島まて薪水を増し
入度 船を寄せしに着船早々より島人船の左右

前後に晝夜ともよ纏ひ群る此方より言葉と
取合ず唯さハ〳〵敷のみて其うるさ紀事限り
なし何卒先是城追のけ薪水を嶌より求入る
支を取手ひくまとよりいひろう彼両人の答る女人
を船へあげ試みる水夫等をして炉婬せしめ聊
物を與へ玉へ左ハ〳〵八人氣和きて何事も自由なる
ゆ〳〵敷へきり此言葉に随ひ使節も知ぬ顔まて
上役の者心得水夫共よ内通し教の如く取扱せ其賃
〳〵て鍊鐵の拵ものを宛取せけまハ大ひよ悦ひ持
歸りきり是より男女心やすくきて船の者へ千傳陸
より水等を運轉し入る支ゑ成ぬ大きなる桶へ湛へ
きる水此方の人二三人まて運ひ入る物を島人も壹人
まて擔ひ入きり其力量ハ知るなきや

一 彼事教へし西人の者へさらけの下帶を
謝礼として送きり

一 「サノツト」を上陸し謝儀として嶌主へも出
會のよし刀金なき鉞を謝礼とて送きり
兼て用意せしと見へうる彼より衣を返礼
しきり

一 嶌主別て恐敷者の由昔しる此嶋人生き
なる人をも食ひ今ハ死人のみ食ひ親族と
ふとも擇ひなくなり土地よ椰子多く專ら

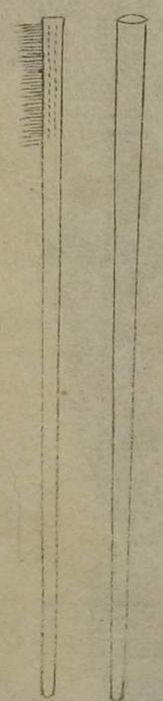
是を食すること

一 島の内居家とゝふもの別なく岩の狹間なと
に居ると聞り

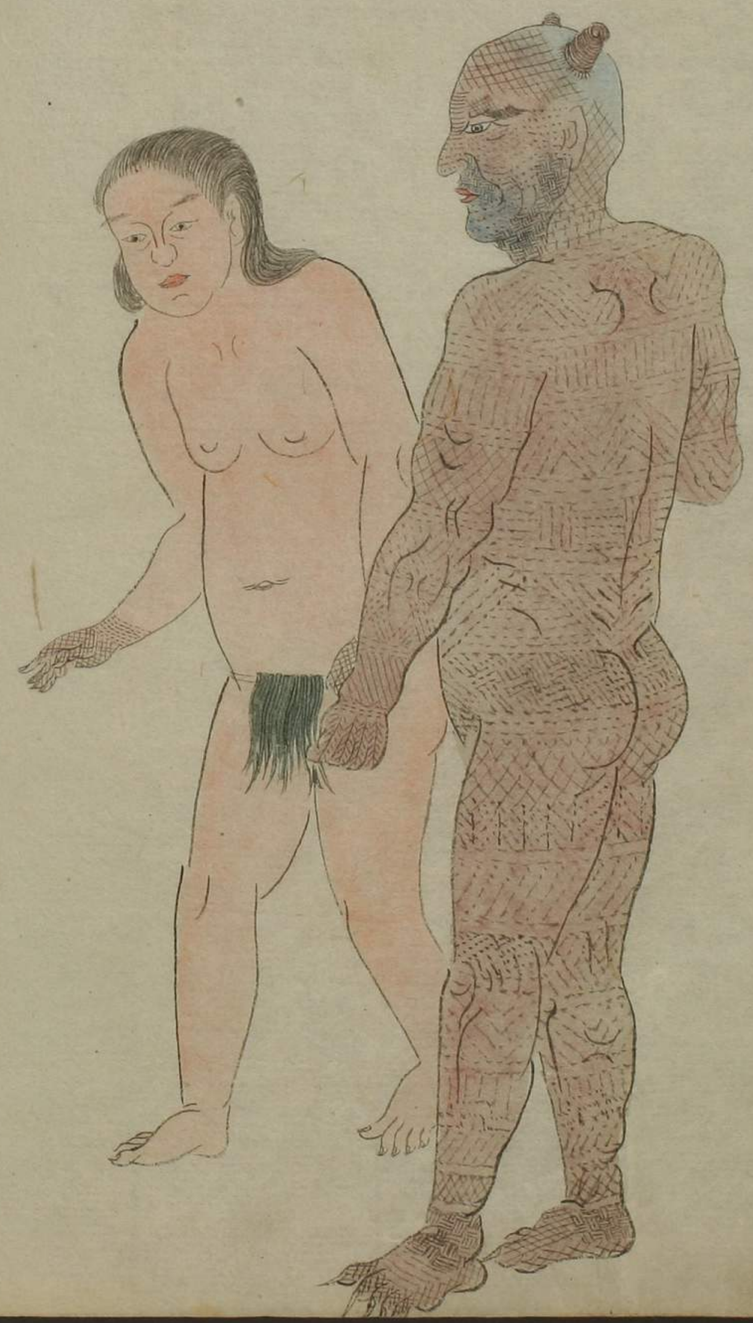
一 柄拂(ツカハライ)の如く魚骨を以製し其毛なるへき取へ其
魚刺(ウヲノトゲ)を植へきもの有り是を以て惣身(ホリモノ)彫物
をなす思ひその模樣あり頭面(アタマ)より手足の
端々まて殘る取なし但額の兩角髮を殘
しなく亦おく是を遠見まハ角の如く偖水
夫の内試ニ島人を雇ひ(ヤトイ)脇(ウデ)に文字を書き
て彫らせ終て槍の如きものありて右器(ウツハ)を身の
上にあて槍(ツキ)をうちて流血(テノヒラ)出まハ手掌にて

ぬき取りなくほり又ふき又ぬりて間もなく
出来あがるとき甚手際なる事や其文字魯西
亜文字にて何年何月幾個此島へ来りしと云
支をほりなせし由なり 此島にハ固より文字なしと國の

黥(イレツミトウク)器圖



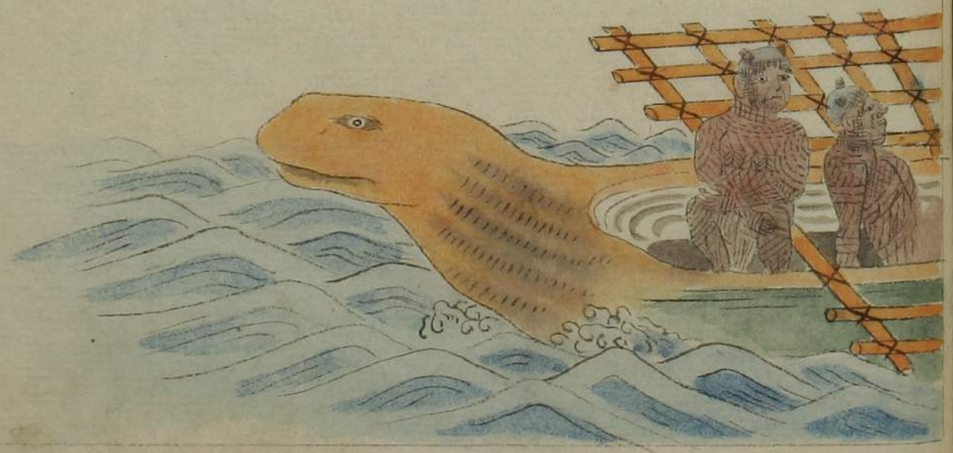
ヘルケイサ嶋人男女之圖



一島の廣さ何程あるやしらず追々此島出船一晝夜走り其翌日の四時頃走り被けし故餘程大なる嶋と見へあり島のうちゝ高山も見ゆ

一島の船々大材の中を堀めたる物なり大蛇の形を象る艏先蛇頭舳ハ丸木を彫り尾の形もす細長く倒まに曳き様子やゝ丸き故るや両脇へ分ち物あり

花の圖の如し



如斯所世界の中 絶て是まかりもいまだしと
船の人々いくつ皆島人を「ゼイロ」々々といひくつ
鬼人ともいふ事なかり

一數日滞船して此所を發ち
桜ヶ此ヶ「マルケイサ」を南亜里利加洲の西
あり遠洋に在る土地温熱の一小幽嶋
なり昔時ゝ政羅巴洲の人といくゝ通
船せざるを見へ世界舊圖を見る取なし
近年拂郎察國新製世界図ゝを是を
出し此度將來の魯西亜版世界圖
ふと出すなくし其の所在拂郎察

製の圖と校すれ八十度の差ひあり拂
郎察圖を以て正とすしと同氏云
又日洋中船路の標的となる所なる故
かくゝ以て船を寄せしと見る

十月三四日頃「マルケイサ」出船
海路記を按るに此島より船を繫る支
日數十三日まして彼六月六日我四月廿九日
發帆と見る漂客暗記なる所の出船の
日とは二三日の差あり
大抵東へ向く走る様に覚る又世界
の真中へ出しとて船中初めの如く酒宴

をなして祝儀しきりに

一ルケイサ発帆以後海路記

彼六月七日　我四月廿九日　彼六月八日　我五月一日
彼六月九日　我五月二日　彼六月十日　我五月三日
彼六月十日　我五月四日　彼六月十二日　我五月五日
彼六月十三日　我五月六日

按ずるに世界の真中とゝなる八郎コロクットル赤道へ
間氏曰カナリヤの「ベッロ」島より迄経度一百
廿度の所なりして赤道を北へ距るの船路
なりしなり全きに彼同年六月十二日なりして
我五月六日なるべしルケイサを開帆して

七日目と見めらく赤道下を西より南へ彼
南より北へ両回経見たるの渡海彼人と
いへども稀有の事なりして我東方の人は存
てまた返さるも開闢千古未曾有の壮
観

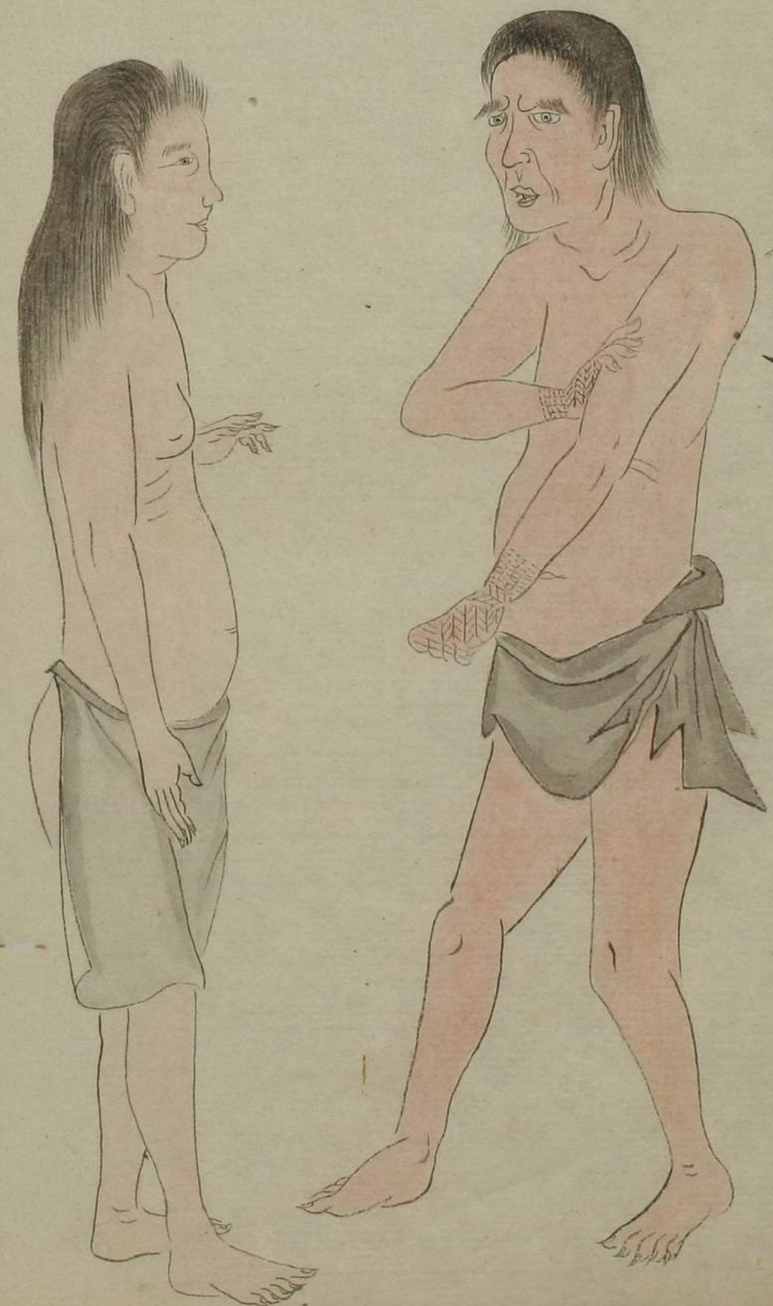
彼六月十四日　我五月七日より彼六月廿七日我五月廿日迄
合す

赤道を過きて三七日程走り千五百里程なり
サンペイッケと云大島の邊へ船を寄せ此島へ
午未の方へ走り着るあり嶌の長サ一ルケイサ
ゝ大ひ成様なる見め伊豆の大嶌程もあるべき歟島中山も見め

但高山とハ見へぬ氣候「ルケイサ」同様と覺ゆ書
も此嶋山の根迄船をよせ夜も沖へ出せり
何故斯船を出入せる船中の人を問ひ
ハ此島へも何の訳あってハラン
ソースケの人來り居りて歸国せぬと
聞ハ「コンリースケ」も本國へ心服せぬ國
なるハ如何様の陰謀あるかも難斗故
疑ハしく思ひて上陸せぬもの
寫人「ルケイサ」人乘る同様の船よりの
來るを見しに男ハ髪を残切よし
甚奇怪なるハ必ず前歯二枚を拔

なり丈ケも日本人ほどあるへし廿ハ髪長く
額上の所少し残切よし其部の髪七
真白なり是ハ自然なるか又白きものを
傳ふる欲たしかかも見とめぬ木の皮の如
き物を前へ巻きあり
船中の人曰此島も日本地へ近く前海
ともいふ所にて辰巳の方へ少し寄る所
と圖を出して示せり

サンペイツケ島人男女圖



嶌人の船より承を買求本船へ金を近よて外交易支度等もなし

地圖海路記を按するに「サンペイツ」と云名なり「サンドウイク」嶋より船をよせしと見なり此名の覺違なるべし其島より着せし事彼六月廿八日我十月廿一日と見へたり「ミルケイサ」を出帆して十昔めなり漂客等三七日を經て到りしと覺しハ不審（イブカシ）しき書の内嶌根へ船を寄しを地形並に度數等を測て見る為なるべし

間氏曰此島も往々西洋人海船の

標的(アテ)とすると見るべしと思ふに亜墨(メ)利加の南海を廻り「マルケイサ」を的として西へ〳〵又「サンドウイヒ」を的として北へ渡り方位を轉じ我邦或は唐山(カラ)印度(インデヤ)の南海へ渡ると見るべし

此度魯西亜人も是迄倣ひて「カミシヤーツカ」に到ると思はる此圖魯西(ヰロシ)亜人の測量、弐百二拾二度許より有て「柳弗」郎察人測量せる所にて此島の経度二百七十七度許あり相較(クラベル)ずる五度の差(ヘダテ)あり弗郎察乃測量を是とするに似たり

是魯西亜の我長崎の測量を差あると云ふ

此「サンペイツケ」を出船して是より「カミシヤーツカ」へ向ふ海路記を按ずるに「サンペイツケ」彼六月廿八日(我廿九日)着し玖幾日に發し「ゑるや」地の月廿九日(我廿二日)より以下彼七月十日(我六月十日)迄日數十四日の間原圖に日暦を闕く其義なるべし漂客等「ゑるや」「サンペイツケ」に八數日滞船せる様子なれば此間の日暦脱するや否哉解し難し

日數十四日を闕て後の日記

彼七月十三日　我六月七日以後の日暦合〳〵
彼七月三十日　我六月廿四日　彼七月三十日
我六月廿五日　彼八月一日　我六月廿六日
彼八月二日　我六月廿七日　彼八月三日
我六月廿八日カミシヤーツカに着岸と見る

日數廿日程走り晝の内快晴にて日の光り照り耀
間滿天の諸星見へる夜二日程あり但夜中程よ
明朗にてハあ〳〵さらし〳〵船中にも不審と思ひて空
を望める樣子の者もありしよ何ら子細ある支と見へ
て力へタに拂を笑ふて居まて日本へ近き海上にて
なりてハ北の方へ船を走らせ日本地をハ左にな
して通ると皆〳〵ひきうけ
此海上島山の多絶て見うけ
船一日前より山を見かけ
カミシヤーツカに着

七月三日　カミシヤーツカに着

海路記を按するに彼八月三日我六月廿八日
カミシヤーツカに着と見る長崎にて阿蘭陀
通詞和解書上に彼暦數一千八百四年
九月三日（當子七月廿九日）カミシヤーツカに至ると
あり　茂質按彼九月を八月の和解の
誤り我七月を六月の誤りなる〳〵日並ハ

一二日の差をあゝ月の誤り八一月を
差ふ支故大相違をなすなり

此所魯西亜領分東北の盡境本國より數千
里のそしまて我蝦夷地へも接近(ツイカ)の所なり船頭
を始め使節其外乗組の者此所へハ始て来る
事故カミシャーツカ口に着せりとハ知ると雖も湊口不知
彼是と船伐廻し堂り尤安しき繪圖あり〳〵
漸〳〵見合せりる知るとなく湊により先き〻船を
やゝ過し又乗り戻しよりふ〳〵知るとなく湊も
袋をなす所なり湊の場場より餘程千前の中
程に圓〳〵して白く見ゆる小嶋有り名を(ツタロープカと)

頂に樹十本程あり人ハ登りかゝるとなく
是鳥の糞にて盡く白くなりて居る樣子

是より左るかに海上より
望みて湊口の月當と成るなり左かるに海より湊伐
あるを所の入口至て狹く左右両方より高山相峙(ソバダチ)する
所にて初め其際近も行きたるも更に湊の合とハ
見へ不尤右月當の白嶋と見へさる故さるより
先きの海岸まて乗り過し知を得ずして又
そこを戻りがけに餘程引をあるまゝ海上より湊
内の白嶋見へ堂り各悦ひて其通りへ船を近寄
せるまハ初め見付ある両山峙る間の至て狹き所なり
其口より船を入るまハ内を灣(ワン)をなし至て廣き
湊なり湊内へ入り段々船すゝ行くに其小島

の前を通船し横ゟきまして湊へ着せその間
洲多き、場所あり とて是ゟ避る様ゟ船を廻
して着岸せり 入口の所より八十里あり とゝ
此所を「バウラツケガワ」といふ「ウラツ」ゟ是迄拿領
せし中興の帝王の名を取りて名付し「ガワ」ゟ
湊の事をいふ
此湊の名先大夫を「ペーテロガキ」といふ
湊入早々石火矢を放し「ゟ」ハ湊の者共是異国
船入来りしと心得騒動の様子なりけるゟ本船
へ建る旗幟の記號を見うけ安堵の様子
よて間もなく鎮り番船を出し案内して着

岸せしむ使節並ゟ上役の人々上陸ゟ

大船
海口
白島

ハウラツケガワ湊圖

人家も拾七八軒もあるべし木作り至て麁畧
藏もあり
燈消藏大筒石火矢も湊の海岸甚堅上に數挺
備へ置り
湊の内に八百石千石積位の小船斗り繫居きり
此所に「ヨルヒ」といふ官にて豆輕頭城きる人在勤す
「カミシャーツカ」足輕惣人數六百人斗りと居るといふ
皆本國より勤番す
「ヨルヒ」杯首尾能勤むきハ五年も十年も
詰居る上役の者も拾人ばかり詰居る
様子なり豆輕も諸役所も勤え遠見

番所へも詰るといふ非番の時も何とも猟に
出つるなり
土着の人を「カミシャーダ」といふ此所より他へも往き
て居る様子にて五七人見うけ申す髪眼共に
黒し鹿皮にて制衣せる服を着る襟の處より頭へ冠様に
仕立るものにて土地寒國故の事なり
八月に至ては雪降て半過より湊を水るは
嚴寒の節も「カホーツカ」迄千里の間海氷り
雪車にて氷上を通用するといふ此所も馬
なく犬を使ひ雪車に荷を積て通用
せしむる故「カホーツカ」の如く使節ハ此仕

懸を見ざる支なき故其時節はあるべき事
も陸にて其仕方いろ〳〵見せまつり（圖說等ホホーツカ の部に詳す）
是より奥に「カウエリホ」（上へと云ふ支へ爰にては北
「カミシヤーツカ」又「ニースノ」（下モと支）カミシヤー
ツカと云ふ両所あり「ニースノ」方は餘程打開き
人家も多く「カミシヤーツカ」惣州取締りの代ノ
官もさくに在勤と云ふ
使節此所へ立寄りしは土地の様子見分
萬事の取締り申渡又右より備へ置き
石火矢等の破損せし等も等閑にして
捨置やなんと言様の支を吟味し旦日

本交易取組の事出来まじは此地方より
運送を企きゆ合の類なり並に席は使
奥蝦夷嶋所領の地なるを表裏の両
邊見届の為なるべき
滞船中廿六日に代官もこゝに来り
使節に出會し又此所より兼組人々も
来る着岸早々飛脚を立る由
「ヨル」と云ふ官人此所より両人兼組長崎へ
来る「ミートルイワノイチ」と云ふ者「イワン
ノイチ」と云ふ者なり　是輕六人此所より
兼ねたる「ニースノカミシヤーツカ」より来る

故皮船に乗りて其島々の間城一日二日宛
まて渡り廻るはし少々宛の遠近も有と也
桜伊勢船子光太夫ハ漂着島より此の
カミシヤーツカ迄の船に乗りて地方へ入
り歸路を「オホーツカ」より出船と送り
届けらるゝ由
海路記を按するに此湊滞在も
三十餘日と見ヘ

八月廿日

カミシヤーツカ出船
長崎阿蘭陀通辞共和解書上に八彼九
月十日我八月七日カミシヤーツカ出船と有

漂流人覚来る處の八月廿日といへるも
二日の違し有り
是より日本長崎迄の渡海なり此所より長崎迄
三十日の見詰まて出船より日和よき三七日まも行
かまと船中の諸役人申さく世界第一の難場なり日
日本海の沖も浪荒く故折々破船する事
本船を造り方千緩き
夢きまたいとなりなりと便節言へり
通船の所も地方より立百里沖なりと終に見かけ
ある事なし
携乃入来る繪圖を毎日船中にて見合せ圖に出し

ある外の嶌もありやと水主を毎度帆柱の上へ
登て遠見せさせぬるす
出船して間もなくさて蝦夷沖なりとつひ夫より
暫く行きて此通りを仙臺なり倆等の故郷へとて
繪図面書冊抔取開き我々へ指示しなり又そこら
をも通り抜けたりを日本の都城江戸の節にあるを
又暫く行きて此あてよハ嶌七つあり其中にハ丈
いふ島あり依等此邊知りあるへしといふ如此段々日本
地の様子言せ共家初より一向地方方角も知ぬ
事故更に合点行かさりし故にさしもあるへ
答へハ蝦夷織物の出る八丈島をあるへしとハけしかる哉

なりと云ひしなり八月廿五六日頃と覚へ山見へけるハ
彼取ハ薩摩也といふ此沖よりハ琉球なり今
通る取流球と薩摩の間へ各さきりやといふ此邊
ぞ通船なる哉なり固より知るへ答へなるハ
我國内の事知るへしといふを偖も油断の哉なりと
嘲り笑ひ同廿八九日頃薩摩浦近く船をよせけるが
此節大時化なり地方へ向ふを隨ひ波浪至て荒く
船へ波を打込使節の部屋へも汐入りて腰きりなり
なり上棚へ置きし荷物をさんざく疵を損せる程故
船も餘程いたみ笑ひ八月廿八日の大嵐まて舶の硝子障子まて
大浪まて打崩せしこの噂を此時の哀成へし
彼國の船ハ内へ鋭の延る杙をさし汐の打込ある左右

船をゝる透間を付ケ置く故其所より漏き出沢て船
底へハ水入らぬ様ニ志ゐる物へ
然ときゝもきまてハ又打込々々志ゐし故殊の外當惑
して此邊ニて大ひニ手間取り是まて覚なき難儀
と皆々申ゐり
本船ニて留り居るを見付しゐや向地の出崎ニて篝
火を焚き申ゐり使節是城見く薩摩地ニてかゞり
をたく・なきハ我々ニて到りし支ハ皆々着岸前ニ
長崎ニて船の入る事を知り居るへしといへ
向ふに高山見へけきハ半月形りの器ニて是を測り
見ゐり是肥前の温泉の嶽なり

梅ニ此器を「カクダンビ」又「イスタラビ」なるの
測量器なるへし
薩摩の嶋々の内ニ「タナゴ」嶋といふ取有り何きの方
なりと使節問ゐり我等未ゝ到らぬ地故更ニ志ら
ぬと答へりきハ誠ニ倫等もあ所ニ心なきものへ
我境内の事を志ゐ所ニ戯きゐりひゐ
「タナゴ」島を種子島の事と聞り案ニ種子島
と称ゐる本名なるを今ハ訛り嶋といひ
おそらく彼も舊名を傳聞せしゝ為ん
羅針盤始ゐ己午と走り蛮夷地の沖といひ取り
南へ走りてきより申酉又酉戌まて走りしゐ

初めて薩摩の山を見かけそう此船中一日より両度
宛酒を飲せそう

海路記を検るに彼八月三日（我文化元年甲子六月廿八日）
カミシヤーツカ着三十餘日滞留と見ゆ
長崎阿蘭陀通詞共和解書上に彼九月
十日我八月七日カミシヤーツカ出帆とあり
漂客を我八月昔出船と二日の違ひ
書上のかく可なるべきら偖海路記を検するにカミシヤー
ツカを出帆するの日を記せず海口より一京
あり其所より朱線を引き出し一日路定
めてもしめて廿八日と日記す志まい彼廿七

日発帆すらやうに見へそう然まるを和解
書上に右のごとくして長崎着岸の日取ふ
引合するふすに甚だ相近し但海路記発
帆一日路として彼九月廿八日と記するもの
不審（ふしんカミ）しとし或ハいよく彼九月十日ふ
発して カミシヤーツカ の湊口なら欤又一日
路を行きて同廿七日迄日数十七日（我八月十三日にあたる）
滞船なるら疑もし或ハ此日暦を記し
たら人の誤りなら欤
彼ら朱線日暦のまゝを記そまハ
カミシヤーツカ 海口ふ一京あり ふいより一日路

の所は廿八日と有り是彼九月廿八日と見る
我八月廿三四日頃 夫より三点目は三十一日とあり 彼九月日數三十日
定數は三十一日は八月に是又疑ふべきまあり 記者の誤なら其次所を詳ならず 其次の点一日
とあり 是彼十月一日 我八月廿八日頃歟 夫より二日三日四日廿日
六日七日八日九日十日十一日十二日と記せる終り
此十二日長崎伊王崎は船を繫し日也 我
九月六日はあるべき日なり 然るに我月
日は配當なれば九日にあるべき日と見るべ
此日並我月日は合せば是記者の誤る處
あり故其儀知るべし 日記の点を用ミシ
ヤーツカ海口より伊王崎迄十七点あり志ま

志ま八十七日を以て長崎へ至るか知る能はず
我八月七日は発し三十三日ふして着岸と
の書上はまた此日記点と日附合せば若
湊内或は洋中數日滞船せるか海路記
はなりて決し難し 誤り記せるまなるや
猶地図と偪せ見て是を知るべし 姑く
彼日記のまま城録し置くも志のみ

環海異聞巻之十三 終